

260926-動画による祈りの会_由佳先生・里香先生

【由佳先生】

皆さま、9月26日の『動画による祈りの会』にご参加くださいます。まことにありがとうございます。本日もよろしくお願いいたします。

里香先生から何かありますか？

【里香先生】

秋ですね。今日は長袖でも肌寒くて、お散歩に行ったときに、もう秋だなと思いました。

昨日が中秋の名月で、曇っていたのでお月さまはちょっと見えなかったんですけれども、面白いのが、中秋の名月でも（実際の）満月は明日なんですね。

欠けたお月さまを見て美しいと思える日本人の心って本当にいいなと思いながら、昨日は過ごしていました。

その名月と満月の真ん中の今日という日に、私たちはこの祈りを通して、欠けたものの美しさのようなものを満たしてゆける。そんな日が素敵だなと思って、今日は皆さまと繋がれるのを楽しみにしてまいりました。

【由佳先生】

素敵、素敵、すごく素敵です。今日のテーマも「神と人間」というテーマでお話があるので……ごめんなさい、途中で切ってしまいました。

本当に私が思っていたのは、美しさのお話に戻ってしまうんですけれども、熊本の地震からちょうど2ヶ月くらい経って、また新たな台風が今沖縄の方へ進んでいるという話を聞いたり、千葉でも愛知でも豪雨が予想されているというのもお聞きしたりしています。

本当に今、復興やさまざまな状況に取り組まれている方々がいらっしゃる中で、それもまた今日のテーマと繋がってゆくなと思いながら、でも里香先生が言ってくださったお月さまの美しさ、欠けようが満月だろうが、その美しさを私たちは見ながら、今日もメインプログラムを進めたいなと思いました。

<由佳先生の英語での説明>

【由佳先生】

ということで、皆さま、本日もどうぞよろしくお願いいたします。ではまず、お祈りから始めていきたいと思います。

<世界平和の祈り>

【由佳先生】

それでは今から、メインプログラムに入ってまいりたいと思います。

【里香先生】

今日も五井先生のご法話の朗読から入っていきたいと思います。以前にも読ませていただいた『続・宗教問答』。この本は本当にさまざまな視点からの問いが凝縮されていて、その様々な問いに五井先生が答えられているというのは、とても響いてくるものがあります。

今日お読みするのは、53 ページの「人間が神の子であり、神が完全円満ならば、なぜこの世に悪や不幸が生じたのでしょうか、なるべくくわしくやさしくお教え下さい」という質問に対する回答です。

ここでちょっと皆さまにも感じて、考えていただきたいなと思います。私たちは神聖である、神の子である、神そのものである、光そのものである。なのに、なんで苦しみがあるのか、悲しみがあるのか、病気があるのか。

今から 1 分ほど静かな時間を取りますので、この問いに向き合ってみて、「なんでだろう」、そして「自分の答えはこうだな」「私はこう思う」というその答えを、少し抱きしめてあげる時間を持ちたいと思います。

皆さまは神の子、神の分霊である、光そのものである、神聖そのものである。でも、なぜ苦しみや悲しみや孤独や、戦い、争いや対立が目の前に起きているのだろうか。

<里香先生の英語での説明>

【里香先生】

それでは、五井先生はこれに対してどのようにお答えになられているのか、読んでいきたいと思います。

ちょっと長めですので、リラックスして、自分の答えを抱きながら、自分が向き合ったその答えと比較するとかではなく、五井先生がこれに対してどうお答えされているのかということを、お聞きいただきたいと思います。

<五井先生『続・宗教問答』 問 101 の朗読>

問 101 人間が神の子であり、神が完全円満ならば、なぜこの世に悪や不幸が生じたのでしょうか、なるべくくわしくやさしくお教え下さい。

答 この問題は何度びとなく質問される問題ですが、非常に重大な根

本的な問題ですから、また改めてなるべくくわしくお答え致しましょう。この問題がはっきりしないために、折角の宗教心を曇らせて、唯物論者になった人々が、かなりあるのです。神が大愛であり、絶対者であるのに、何故人類の不幸をいちはやく正しくしないのか、という問もありますが、これは同質の問題ですから、このことも含めてお答えしてゆきましょう。

この世の姿を見ておりますと、全く悪や不幸に充ちております。自己の利害のためなら、親兄弟をも退けうとんじ、恨み妬みさえします。まだ、民族間や国際関係においても、自民族、自国を守るためには、他民族や他国の損失など顧みる余裕のない行為をしている場合がたくさんあります。

こうした姿を實在の人間だとみている人々は、人間の性は悪なりとして、性悪説を唱えているのであります。この世の思想は、昔から性善説と性悪説とが入り乱れておりますが、両説ともに肯づけるものをもっているのです。私はどちらの説かと申せば、勿論性善説であり、しかも徹底した性善説、つまり、人間神の子説なのであります。人間神の子説にも種々の説き方があるようですが、私は徹頭徹尾、人間の性の善なることを認めて、いかなる悪も不幸も消えてゆく姿としてるのであります。いわゆる全くの光明思想なのです。他の宗教者の中には、折角人間神の子完全円満と説きながら、その口の下から、人間の心の悪を把えて、おまえの心が悪い、おまえの心の影として病気になったり、不幸になったりしているのだから、おまえの心を直さなければいけない、と神の子であるべき人間の心を責め裁いているむきもありますが、こうした神の子論光明思想は中途半端なもので、ある時は神の子になり、ある時は悪の子になってしまい、人間は果して神の子なのか、悪の子なのかわからなくなり、ついには、人間は善悪混交の子として、神と悪魔の両性の子となってしまうのであります。その教えがいかに悪はないのだ、不幸はないのだ、悪魔はないのだ、と一方では説いていても、罪や不幸や悪を、人間の心として認めて、おまえの心が悪いから相手が悪くなるのだ、という精神分析的な教え方をしているのでは、神の子であるべき人間の心に悪や不幸を認めていることになり、どちらが真実か一般大衆には判然としなくなるのです。そういう説き方を致しますと、神の中に悪があることになり、神は完全円満でも、善そのものでもなくなってきて、信者の心が、永遠の生

命の輝き、からっと晴れわたった心境をいつまでもつづけてゆくことはできなくなってしまうのです。

誰がなんていおうと、神は完全円満性であり、人間は神の子であることは間違いのないことで、神の子である人間には、悪も不幸も病気もなく、悪い心も誤った心も、心の影という暗い影もないのであります。それはすべて消えてゆく姿であって、神の子としての人間の姿が、真実の姿をこの世に現わすために、未完成の領分が次第に削りとられてゆく、削り屑のようなものであります。

それは前にも申したことがあります、彫刻のようなもので、神の子像という彫刻像が完成されてゆくに従って、種々な形の切り屑がそのへんにちらばってゆくようなものなのです。その切り屑を相手どって、おまえの心はこんなに悪い、私の心はこんなに醜いなどと、人を責め裁き、自己を責め裁いているのですから、今日までの宗教の在り方は、光明思想として不徹底で、人間神の子の真の生き方を教えていたというわけにはゆかなかったのです。

ところが、実際の生活面、社会面或いは国際面においては、この切り屑的悪想念、悪行為が、どうにも善想念、善行為の邪魔をして、かえって、善行為や善想念が負けてしまいそうにさえ見えているのです。ですから誰しも表題の問が出したくなるのでしょう。

ここで私の答えを一步進めなければならなくなります。

私は人間を、肉体人間だけとして説いてはいないのです。肉体人間というのは、永遠の生命である人間の、ほんの一部であるというのです。私はその真理を知識として知っているのではなく霊覚で知り、実際体験として味わいつつあるのです。そこで私はいつも、人間というものは面白いものだ、不思議なものだ、と思いつづけているのです。こうした経験を直接的にあるいは間接的に知っている人は、私ばかりでなく、かなり多くあると思うのです。永遠の生命というのは、ただ単なる哲学的言葉ではなく、人間の世界に、真実のこととして使われる言葉なのであります。

人間が肉体人間としてだけで終りならば、神が完全円満でも、人間が神の子でもあり得ません。神は不完全であって、悪魔と戦いながら、完全になろうと努めているものといわれても仕方がないし、人間は神に創られたまま、後は神はなんらの責任ももたず、人間のみにもその責

任が荷せられるということになって、人間は単なる神の被造物となり、人類の救われというものは永遠にあり得ないものとなります。何故かと申しますと、肉体人間の一般の人々は自己保存の本能が主となっていて、自己を守るためには他を倒すという、動物と等しい行動をするものでありますので、常に利害の上において相対的である人類社会は、永劫に戦いの場に立たされているということになるからです。

ですから今日までの人生観、世界観で進んでゆく限りは、やがてはこの地球界は滅亡してしまうことになるのですから、神の完全性、人間の神の子性も真実のものではなくなってしまうのです。そこで、今日までの人生観、世界観を、ぐるりと一変せしめなければならぬことになってまいります。一変するといっても、真実をくつがえすというのではなく、釈尊のいわれている、転倒妄想している地球人の思想行為を、真実の思想行為に正すということなのであります。

今日までの人生観、世界観は、逆さまの想念行為であったのです。どのように逆さまであったかといいますと、真実の人間、真実の世界を無しとして、ただ単に真実の人間の道具として、表現として現われている肉体というものを、実在としていることと、やはり真実の世界の表現場所である形の世界を、実在の世界と思いこんでいることであります。

このように真理が、真理として認識されぬ間は、人間が神の子であり、神が完全円満なのにこの世に悪や不幸があるのか、という疑問が起ってくるのです。

神の完全円満性を否定しはしないが、悪魔や悪人が実在として有るという宗教思想は、どうしても中途半端な思想で、善と悪、神と悪魔というものを対立させて考えていることになるので、人間世界に対立抗争の波は消え去ることはないということで、神の完全性に対する不敬になるわけなのですが、相当な宗教者でも、ついこうしたところがあいまいになってしまっているようです。

神と悪魔を対立させて考えていながら、周囲の国々が皆軍備をもっているのに、日本だけは軍備をもってはいけない、という考え方をしている宗教者がいますが、これはやはり半端な考え方で、日本が軍備をもたぬという考え方をするならば、その人々の心の中に悪魔や悪という存在を、すっかり消えてゆく姿として、神のみ宇宙唯一の存在者

という絶対的な立場に自己をたたせなければなりません。

またその反対に悪魔や悪を認めぬ神の完全円満性を宣言しながら、それでいて、自国を侵略してくる敵を認めて、軍備を持つことを唱導する宗教者がいるのですが、これもはっきりとした宗教思想の確立していない宗教者といわなければなりません。

私は、人間というものを、永遠の生命の具現者と観じていますし、神の完全円満性を確信し、人間神の子の真理を体覚致しておりますので、この世において現われる一切の悪魔的行為や不幸なる状態を、すべて、人間がこの地球界において、神の姿を顕現するための過程に起る一変化として、現われればそのまま消えてゆく姿や行為としてみているのであります。また人間一個人としては、自己の生命がいかなる環境においても、そのまま神の子としての能力を出し得るための修行過程として、悪や不幸のような姿が現われているのであって、悪や不幸がそのまま実際にそこにあるのではなく、真理を知った時に、その悪や不幸は直ちに消え去ってゆくものであることを強調しているのです。

ですから、悪や不幸や病気を、実在として掴んで放さないうちは悪や不幸や病気はいつまでもその人から消えないでしょうが、悪や不幸や病気を消えてゆく姿として、そのまま神のみ心の中に入れ切ってしまう人には、その時限り、そうしたマイナスの姿はなくなってしまうのです。

質問のこの世の悪や不幸ということは、人間の想念が、そうした波を把えている限りは消えないのであり、そうした波を神のみ心に投げ入れた人からは消え去ってしまうのでありますから、その人が真実に神のみ心に飛びこむか、飛びこまぬかによって、この問題が解決するわけなのであって、これは理論上の問題ではなく、実際行為の上において答えの出る問題なのであります。

これは個人の問題ばかりではなく、国際間においても、全人類の間においても、等しい答えの出る問題なのです。

そこで私は、この問題の答えを最もやさしい行為により、実際体験として、多くの人々に認識させようとして、消えてゆく姿の教えと、世界平和の祈りの実行を、皆様にお薦めしているのであります。

こうした宗教的問題は、いくら巧緻な理論を展開しても、その理論

が実際生活の上において行いにくいものであったら、これは一般大衆の上にひろまってゆきません。一般大衆にできぬようなことは、現代の宗教としては、著しくその価値を下げることになります。今日では、少数の偉人だけではどうにもならぬ時代になっているので、どうしても一般大衆の力というものの必要を痛切に感じるのであります。

私の世界平和の祈りは、少数の秀れた人々にもわかってもらえるし、一般大衆にもやさしく理解でき体得できる、世界平和実現の方法なのであります。この世界平和の祈りをしていますと、いつの間にか、人間の本心が開発されてゆき、個生命の永遠性と、宇宙生命との結びつきとが、知らぬ間に体得されていって、日常生活における不安が消え去ってゆくと共に世界人類の業想念消滅の働きができていくということになるのです。

本心が開発され、個生命の永遠性、つまり人間は永遠に死なないので、種々な階層において生きつづけてゆくものであり、すべては神の慈愛のみ心によって、指導されてゆくものであって、悪などというものは真実存在するものではないという真理がわかってくるのであります。

それにはやはり、人間各自を守護し、人間の運命を指導しておられる、守護の神霊の存在を信ずることが大事なのであります。そしてそうした守護の神霊の一大集団が救世の大光明として、世界平和を祈る人々、国々の上に輝きわたり、地上天国実現の大きな役割を果たしておられるのであることを心に銘じて感謝することが大事なのであります。

ありがとうございました。

五井先生の「悪は存在しない」「命は輝くことしか知らない」ということを、改めて確信させていただきました。ありがとうございます。では、由佳先生、お話しただけたらと思います。

【由佳先生】

はい。里香先生、いつも本当に素晴らしい五井先生のご文章を探し出し、朗読くださって、本当にありがとうございました。

私が今回このご文章をいただいたときに思ったのは、もちろん五井先生の消えてゆく姿であったり、世界平和の祈りというのは知識では理解している。

けれども、五井先生のおっしゃる「私はその真理を知識として知っている

のではなく霊覚で知り、実際体験として味わいつつある」というところを、今日の文章でも改めて深く深く感じさせてもらいました。だからこそ「そうだね」と、ハッとなる瞬間があるんです。

今回は例えば、一番最初の部分で、親兄弟でも恨み妬みがあったり、民族間・国際関係でも自国を守るためにいろんなことをしている。その先にふと「こうした姿を實在の人間だとみている人々は」というところに、「そうだ、五井先生はこの現象を實在の人間の姿として見ていないんだ」と、またハッとなりました。

知識として理解しているのと、実体験として知っていらっしゃる方の書かれる言葉との違いに、ハッとなったんです。

だからこそ、五井先生は徹底した性善説であり、人間神の子説なんですけれども、要は、悪も不幸も病気も、悪い心も誤った心も、心の影という影すらも、すべて消えてゆく姿であって、實在の人間の姿ではない。そこしか五井先生はご覧になられていないからこそのお言葉に、フワッと包まれました。

それが里香先生の最初のお話とすごく繋がっていて、お月さまがどんどん欠けたときに、その欠けた状態や欠けてゆく原因を悪と見たり、良くないとなったり、恐怖と見たり、守らなきゃとなったりするのはやはり違うと思うんです。

そこで、「いやいや、お月さまは完全円満で、常にまん丸なんだよ。ただ現象や状況によって欠けて見えたりするかもしれないけど、それは實在の姿じゃないんだよ」というのを、私たちは受け取れているかどうか。

里香先生が言うように、どんな欠けた状態でも美しい。それはまたまん丸になるプロセスなんだよ、というのとすごく繋がっていて。

五井先生は、どんな状況に月が見えたとしても、宇宙の法則をしっかりとご存じで体感していらっしゃるから、「何も欠けちゃいないよ、何も変化していないよ。むしろそのまんまのお月さまは、そのまんまで完璧で、ただ現象や状況で消えてゆく姿なんだよ」と。里香先生のお話と、すごく繋がったんです。

この世を實在と見る宗教者の方や、国を守ろうと考える方々の気持ちも分かるじゃないですか。そうなっちゃうよね、というのは、やっぱり月が欠けた瞬間の、まさしく人間の当たり前の反応だとは思いますが、ここの五井先生の霊覚者としての見方は、本当に全然違う次元でご理解されている。

神さまにお預けする、お任せするというのは、月が欠けようが満たされようが、宇宙の法則のすごさを理解さえしていれば、「お月さま（人類）は完璧なんだ」というところにいける気がしたんです。

そうしたら里香先生が言うように、状況や現象は欠けているように見えても、永遠の命というか、完璧なお月さまの姿を私たちは見ていけるからこそ、世界平和の祈りの中で、里香先生が言った「どの月も美しい」と言えるその心境と、「それぐらい、これは実在していないんだよ」というところに、深く深くどっぷりはまっていた時間でした。ありがとうございました。

ということで、今日はせっくなので、里香先生にもこれを選ばれた理由をお聞きしたかったんですけれども、それは必要ないとおっしゃっているので、時間もありますので、『人間と真実の生き方』をここで奉唱させていただきたいと思います。

五井先生がお答えくださった「なんで悪があるんだろう」、里香先生が私たちに最初に問いかけてくださった「本来神の子であるなら、なんでこれが起きちゃうの」というところのお答えを読んだ上で、改めて『人間と真実の生き方』を奉唱させていただきたいと思います。

はい、では読ませていただきます。

<由佳先生の英語での説明>

<『人間と真実の生き方』の奉唱>

【由佳先生】

はい、皆さま、ありがとうございました。

続いて世界平和の祈りを、静かな時間を、このままこの響きと余韻の中で行いたいんですけれども、里香先生にお願いしたいと思います。

【里香先生】

はい。本当に朗読ってものすごくパワフルで、私は読ませていただいている側なので、五井先生の響きが直に感じられて、読む前と読んだ後の自分では全然違うような波動・響きを、今感じています。

もう一度、五井先生の世界平和の祈りがどれだけ素晴らしいかという最後の部分だけお読みして、それからご自身のペースでお祈りいただきたいと思います。

『世界人類が平和でありますように』『日本が平和でありますように』
『私たちの天命が完うされますように』『守護霊さまありがとうございました』

す』『守護神さまありがとうございます』。常に導いてくださっているこの守護の神霊に感謝を捧げるとともに、この大きなお祈り『世界人類が平和でありますように』、私たちそのものの存在、命そのもののこの響きを、皆さま方その場所でお祈りいただきたいと思います。

「この世界平和の祈りをしていますと、いつの間にか、人間の本心が開発されてゆき、個生命の永遠性と、宇宙生命との結びつきとが、知らぬ間に体得されていって、日常生活における不安が消え去ってゆくと共に世界人類の業想念消滅の働きができているということになるのです。」

人間各自を守護し、人間の運命を指導しておられる守護の神霊の存在を信ずること。そして守護霊さま・守護神さまに感謝を捧げること。そうした守護の神霊の一大集団が救世の大光明として、世界平和を祈る人々、国々の上に輝きわたり、地上天国実現の大きな役割を果しておられる。

私たちが日々祈っているこの世界平和の祈りと、守護の神霊への感謝の心が、どんな働きを私たちに行っているのか。本心の開発であり、そしてさまざまな悪と見える消えてゆく姿を、次元を上げて消化し、高めてゆく働きがある。これを皆さま方と共に祈ってまいりたいと思います。

<世界平和の祈り>

【里香先生】

ありがとうございました。それでは、神聖復活の印を組んでまいりたいと思います。由佳先生、お願いいたします。

【由佳先生】

はい。ではこれから、神聖復活の印を7回、一緒に組ませていただきたいと思いますので、皆さま、どうぞよろしくお願いいたします。

<神聖復活の印を7回>

【由佳先生】

はい、ありがとうございました。では続いて、白光真宏会からのお知らせを、私の方から少しだけさせていただけたらと思います。

<各種のお知らせ>

【由佳先生】

はい、ということで、里香先生、今日もまた『動画による祈りの会』、よかったですね。

【里香先生】

五井先生の文章を読ませていただいて、素敵でした。この間、ある方とお話しさせていただいたときに、創造というのは、相反する二つの働きがあってこそ生じる、というようなお話をしていました。

なんで経験とか人間体験とか、悪とか苦しみとかがあるのかなと思ったときに、光が完全円満で、神が神であれば、創造というのは光だけではない。私たちが経験できる、悪ではなくて暗闇とか葛藤とか、それを通過して光に還ったときに、元の位置にある光よりも、もっと確信を持った、覚悟ができた、経験を通した光に還ってゆくんだなと思いました。

実体ではない、実在ではないんだけど、実在は光のみなんだけれども、この経験を通して、さらに創造した光となってゆけるんだ、と思ったときに、すべてがありがたい働きなんだなと、今日改めて五井先生の文章を読んで繋がりました。ごめんなさい、そこで一つ思ってしまった。

【由佳先生】

もちろん、みんな光そのものなんだけれども、闇を経験して闇に残り続ける場合も、時に人間にはあるかもしれない。けれど、私の経験上、その闇を経験してから光る人の光って、もともとの光よりも何とも言えない神々しさがあるというのがあります。やっぱりその経験が、より光を光とさせるんですね。そうした人の光って、本当に美しいなって思います。

私がすごく尊敬する人とか憧れる人って、話を聞けば聞くほど、結構大変な体験をされている方々が多くて。それも全部一つで、本当に神の姿を見るためのプロセスでしかない。そこを掴まなければ、本当により一層の光が、光として輝くんだらうなというのを、今、里香先生のお話を聞いて思いました。

だから皆さん、安心してこの体験、経験、肉体体験をしていいんだなと思います。

はい、ということで、今日も皆さま、ありがとうございました。

以上